

石川啄木と小樽

倉田稔

人 文 研 究 第 109 輯

122(1)

もくじ

はじめに

第一節 一度目の来樽まで。岩手時代

第二節 一度目の来樽

第三節 二度目の来樽まで。函館時代

第四節 二度目の来樽

第五節 三度目の来樽まで

1 札幌 2 野口雨情(1)

第六節 三度目の来樽

1 『小樽日報』 2 歌壇 3 転居 4 高田、藤田、塚原

5 桜庭先生 6 退社 7 社会主義演説会 8 新しい就職

9 啄木の小樽論

第七節 釧路時代

第八節 第四回目の来樽

1 野口雨情(2)

2 最後の小樽

その後・むすび

系譜・年表

はじめに

石川啄木は、近代日本で最も高名な歌人である。その彼は、短い間だが小樽で生活したことがある。第一回目は一九日、第二回目は、初め一日、次いで第三回目は一一五日、第四回目は六日であり、合計一四一日という期間である。啄木の北海道時代について言えば、その滞在は、札幌よりも小樽の方がずっと長い。だが札幌の方が、啄木をより記念している。また函館は、彼が長く滞在した町だったので、啄木を大いに記念している。釧路でも、小樽ほどではないが、彼は比較的長く滞在し、それゆえ大いに記念されている。小樽でも啄木を記念すべきである。

第一節 一度目の来樽まで。岩手時代

啄木の小樽滞在の第一回は、明治三七（一九〇四）年九月三〇日から一〇月一八日までであり、彼は一九日間小樽にいた。啄木はなぜ来樽したのか。そしてそれまでの啄木の生活を振り返ろう。

石川啄木は、本名を、一「はじめ」といい、明治一九（一八八六）年、岩手県日戸村に生まれた。父・一禎（いってい）は、曹洞宗常光寺の住職であった。母は、カツといった。翌明治二〇年（一九〇五年）、一家は浪民村へ転任

した。啄木は、明治二四（一八九一）年に、渋民尋常小学校に入学し、明治二八（一八九五）年に同小学校を主席で卒業した。そして、盛岡市立盛岡尋常高等小学校へ入学し、明治三一（一八九八）年には、盛岡尋常中学校へ入学した。翌年、彼は文学に目覚めた。この時期に、堀合節子（啄木と同年生まれ）と知りあい、恋愛をした。このとき節子は、盛岡女学校に通っていた。明治三三（一九〇〇）年、啄木は新詩社の社友になった。新詩社は、与謝野鉄寛（てっかん、寛（正しくは、ひろし）一八七三～一九三五）・晶子（一八七八～一九四二）夫妻が主宰した短歌・詩の結社であり、雑誌『明星』を刊行していた。

啄木は、翌明治三四（一九〇一）年に、生徒のストライキに参加した。彼は、明治三五（一九〇二）年、さらに友人らとカンニングをして、中学校を五年生で退学した。彼の歌が雑誌『明星』に初めてのり、彼は、文学で身を立てるべく、明治三五（一九〇二）年に上京した。この初めの上京の際には、姉の夫で、小樽にいる山本千三郎からお金を貰い、東京で、新詩社の与謝野鉄幹・晶子を訪ねた。そしてその会にも参加した。だが啄木は、東京では就職もなく収入もなく、明治三六（一九〇三）年には、父に連れられて帰郷したのだった。その後、啄木は新詩社の同人となり、初めて啄木の名で、『明星』に彼の詩が載った。明治三七（一九〇四）年には、節子と婚約した。節子は彼の才能を信じた。

第二節 一度目の来樽

その後、啄木は、処女詩集の刊行のために再び上京しようとした。そのため、小樽にいた姉・とら子（戸籍名、普通はトミ子）に、また上京の費用を貰いに行った。今度は直接であった。小樽中央駅（現在の小樽駅）にトミの夫・山本千三郎が勤めており、彼からお金を貰ったのだろう。この時初めて、啄木は小樽の地を踏んだのである。

今回は、青森から陸奥丸で函館（箱館）につき、函館からドイツ貨物船ヘレン号で小樽に上陸した。この際の滞在は、明治三七（一九〇四）年九月三〇日から一〇月一八日までであり、一九日間小樽にいたわけである。箱館鉄道が開通（一〇月一五日）したので、帰りはそれに乗り帰村した。こうしてこの年から翌年にかけて、啄木は二度目の上京をした。その時の活動、とくに明治三八（一九〇五）年に詩集『あこがれ』（小田島書房）を刊行したことで、彼は詩人として高名になった。啄木が初めの詩集を出版するころ、日露戦争（一九〇四～〇五）が行なわれた。

第三節 二度目の来樽まで。函館時代

明治三八（一九〇五）年には、啄木の父が宗費滞納により住職を罷免され、家は困窮した。その間、五月に、前述の啄木の詩集『あこがれ』が出版されたのである。ただし、これは自費出版のようなものだった。啄木は節子と結婚し、盛岡に住んだ。明治三九（一九〇六）年一二月に、長女・京子が生まれた。啄木は、渋民尋常小学校の代用教員になり、小説家を目指した。ところで明治四〇（一九〇七）年に、父の復職が失敗した。啄木は、父に対する村の仕打ちを怒り、その年、渋民村を離れる決意をして、北海道に行こうとした。それを函館の松岡露堂に依頼したのだった。啄木は小学校に辞表を出してから、校長排斥ストライキを指示した。このため、免職となり、函館へ向かった。その際、父は残した。彼の肩には一家の生活がかかった。彼はその時の故郷を歌う。

石をもて 追はるるごとく

ふるさとを出でし かなしみ

消ゆる時なし

しかし後に、彼は古里を歌う。

かにかくに 浜民村は恋しかり

おもひでの山

おもひでの川

やはらかに 柳あをめる

北上の岸辺目に見ゆ

泣けとごとくに

ふるさとの山に向ひて

言ふことなし

ふるさとの山は ありがたきかな

函館で、「うまごやし」(首蓓)あるいは「ぼくしゆく社」が、明治三九(一九〇六)年に結成された。¹⁾明治四〇(一九〇七)年一月から「紅うまごやし」が刊行された。うまごやしとはクロウヴァーのことである。大島流人が主宰していた。大島は静内出身で、札幌農学校予科から一高を中退し、函館で英語教師をしていた。啄木はこの雑誌に投稿していたことがあり、ここで活躍したいと申し出た。同人たちは、高名な啄木が来ることを喜んだ。こうして啄木は、「紅うまごやし」の編集をするようになった。だが同人たちは、啄木が困窮していたことを知らなかった。

啄木は明治四〇（一九〇七）年五月五日、船で函館へついた。妹・光子を小樽へ行かせ、自分は青柳町の同人・松岡露堂の部屋に七月七日まで厄介になった。ほぼ二カ月である。松岡は与謝野の門に入り、『明星』に歌を出していたから、知っていたのである。大島流人は雑誌の編集を啄木に譲った。

ここで啄木は、生涯の友人となる宮崎郁雨（大四郎）と知り合うことになる。

宮崎郁雨は、明治一八（一八八五）年に、新潟で生まれた。だから啄木より一歳上である。郁雨は、五歳の時、父とともに函館に移住した。父は、味噌製造で成功した。郁雨は明治三八年、庁立函館商業学校を卒業した。庁立の商業学校は、函館と小樽に最も古く作られたのである。郁雨は、二カ月ほど啄木と函館で付き合い、その後、七月二七日、応招されて軍の演習のために旭川へ行った。それからの郁雨は、啄木のために生まれてきたような人になった。

同人たちは、啄木が生活に困っていることがわかった。もともと、気位の高い啄木は、そういうことは全く口にしないのであった。同人たちの尽力により、五月一日、彼は商業会議所の臨時雇になった。同人・沢田信太郎がこの主任であつたからである。次にまた友人の世話で、六月一日からは、弥生尋常小学校の代用教員となった。

啄木はここに六月一二日から出勤し、一カ月ほど働いた。明治四〇（一九〇七）年七月七日には、啄木の妻・節子と長女・京子が函館に来たので、彼は友人・松岡露堂の家を出て、青柳町に家Ⅱ部屋を借りて住んだ。そこは函館公園の近くである。函館公園は、明治一二（一九七九）年一月三日に開園している。したがって啄木もここを散歩しただろう。彼は青柳町をこう歌う。

函館の青柳町こそ かなしけれ

友の恋歌

矢ぐるまの花

ここで、友は複数であり、かなしは、いとしい、なつかしいという意味である。

啄木は今度は、母・カツを、故郷へ迎えに行き、明治四〇（一九〇七）年八月四日に呼び寄せた。八月九日には妹・光子も小樽からやって来た。わずか六畳二間の生活であった。啄木は長男なので、一家の世話をすることを当然と思っていた。母も、夫ではなく息子の彼についできたのだった。母は子離れができず、母と妻・節子とは壮絶な闘いをすることになる。

啄木は、八月一八日から『函館日日新聞』の遊軍記者もし、一週間働いた。この社長は齊藤大硯であつた。だが八月二五日に函館大火がおき、すべてが焼けてしまった。勤めていた小学校と新聞社も焼失してしまった。やむなく啄木は九月一日、小学校に辞職願いを出し、友人の世話で札幌へ行くことになった。九月一三日夜、彼は函館を離れた。啄木は、計一三一日間函館に滞在したことになる。その間の啄木の有名な歌には次のものがある。

東海の小島の磯の白砂に

われ泣きぬれて

蟹とたはむる

この歌の「小島」は、実際は、大森浜の海岸である。

砂山の砂に腹這ひ

初窓の

いたみを遠くおもひ出づる日

いのちなき 砂のかなしさよ

さらさらと

握れば指の あひだより落つ

たはむれに 母を背負ひて

そのあまり軽きに泣きて

三歩あゆまず

はたらけど

はたらけど 猶わが生活^{ナオ クラシ} 楽にならざり

ちっと手を見る

第四節 二度目の来樽

啄木の二度目の来樽は、明治四〇（一九〇七）年である。すでに述べたように、彼はこの年、函館で小学校の代用教員をしていたが、函館の大火がきっかけで、そこを辞めざるをえなかった。そして、うまごやし社の向井が、

その友人で札幌の『北門新報』の政治記者・小国露堂に世話をしてもらって、その校正係に啄木を採用してもらうようにさせた。母・カツ、妻・節子、長女・京子、妹・光子を、さしあたり函館に残し、九月一三日の夜、啄木は単身、函館から汽車に乗った。途中九月一日に小樽で午前四時に汽車を降り、姉夫婦を訪ねた。この小樽の姉夫婦に、家族の受け入れを頼むためであった。この当時、次姉とら子の夫・山本千三郎は小樽中央駅の駅長をしていた。

啄木の義兄・山本は、明治四〇（一九〇七）年七月一日、余市駅長から栄転していたのだった。鉄道は、前年の明治三九（一九〇六）年に、北海道炭鉱鉄道株式会社から国営になっていた。その初代の駅長がこの山本千三郎であった。いわゆる小樽駅は、明治三六（一九〇三）年に開設され、正式駅名は小樽中央駅であった。その後、高島駅、稲穂駅、中央小樽駅となり、大正九（一九二〇）年に小樽駅となった。現在の建物は、昭和九（一九三四）年に作られ、当時、地下道つきの超近代鉄筋コンクリート建築と言われた。

第五節 三度目の来樽まで

1 札幌

啄木はほとんど無一文で、小樽へやってきた。函館の友人・大塚信吾が旅費として餞別をくれた。啄木は、小樽で小休憩してから、同日の一四日一時半の汽車で札幌へ行った。当時は札幌まで、汽車で一時間半あるいは二時間かかった。当時は函館から小樽へきて、それから札幌へゆくのだった。札幌から小樽までの汽車は、明治二三（一八八〇）年一月二八日に、手宮―札幌間鉄道が開通した。これはクロフォード（アメリカ人）の指揮によって敷設されたものであり、日本で三番目に早くできた鉄道だった。札幌から小樽まで、初めは二時間もかかった。明治

二二（一八八九）年まで、開拓使がこれを直接経営をし、その後、前述のように、北炭（北海道炭鉱株式会社）に払い下げられた。

啄木は、明治四〇（一九〇七）年九月十四日の日誌で書いている。小樽から札幌へ、「再び車中の人となりて北進せり、銭函にいたる間の海岸いと興多し」。これは現在でも言えることである。

当時小樽は日露戦争直後であった。樺太（カラフト）航路が開設され、ソ連、朝鮮、中国等の経済圏との交易が拡大したために、貿易港として飛躍的に発展した。人口は約九万人で、当時北海道最大の都市であり、ついで函館が約八万八千人、札幌が約六万六千人であった。

啄木は、九月一日、勤めることになった『北門新報』の社長・村上祐を、小国露堂とともに訪れた。そして六日から、札幌の『北門新報』社へ校正係として出社した。これは部数六千部の小新聞だった。この日の夕方、母・妻・長女・妹四人が、函館から小樽へ向かい、さしあたり姉夫婦の家に逗留した。一方、啄木は、札幌では友人の下宿に転がり込んだ。だが、『北門新報』が財政難に陥っており、給料も碌に出そうもないことが分かった。九月一日に、函館の弥生尋常小学校の給料の日割、四円二七銭が、啄木に入った。

啄木の就職の世話をした同僚の小国露堂は、本名が小国善平（一八七七、明治一〇～一九五二）といい、岩手県宮古の出身である。田代姓だったが、小国家の養子になった。啄木より九歳上である。地方新聞の発行を試みて失敗し、明治三九（一九〇六）年に渡道し、『北門新報』の記者となっていた。後に昭和二年（一九二七年）、『宮古新聞』を創刊した、あるいは主筆になった。小国は九月一日に、啄木が働き始めて五日後に、近く創刊される小樽の新聞の三面主任にならないかと、啄木を誘った。ここは給料が出なくなるというのだった。啄木はもちろんすぐ頼んだ。勤めている新聞社が傾きそうでは困るからである。ただし、啄木は本当は文学をやりたいのであった。啄木はこの小国善平（露堂）をも歌った。

平手もて

吹雪にぬれし顔を拭く

友 共産を主義とせりけり

啄木は、彼に啓発されて社会主義への関心を深めた。もともと社会主義思想といっても素朴なもので、アナーキズム的なものだったろう。露堂は小樽日報社の札幌支社に就職がきまった。彼は札幌から小樽の啄木を頻繁に訪ねる。

2 野口雨情(1)

同じ頃、札幌の『北鳴新報』の記者に、野口雨情（一八八二—一九四五）がいた。後の大詩人・野口雨情は、茨城県磯原に明治十五年に生まれ、本名は英吉である。彼は、ぼっちゃん育ちであった。野口家は磯原きつての豪族であり、代々水戸家に仕え、多くの山林をもつ富豪だった。父は量平、母はてるである。野口家は当時回船問屋であった。雨情は、四年の小学校、四年の高等小学校へ行った。そこで新体詩に興味をもった。明治三〇年に上京して、東京中学校へ入った。明治三四年から俳句を作った。その後、東京専門学校（後の早稲田大学）へ入った。彼は一九〇二（明治三五）年、一九歳のときに、詩壇に初登場した。

だが父が事業に失敗した。そして明治三七年（一九〇四年）に父が死んだ。そこで雨情は、早大英文科を中退せざるをえなくなつて帰郷した。雨情が家督を継いだ時は、家業は傾いていた。雨情の家は借金とりによつて財産を失つていった。雨情はしかし、ちやほやされ、遊んでしまった。そこで家では彼に嫁を迎えることにした。栃木の豪家、大資産家、銀行家の高塩家のひろであった。野口雨情と同年の二三歳だった。野口家が栃木県のこの娘を妻

に迎えたのも、家の再興を願ったためであった。野口雨情は、これが政略的であったために、この結婚には気が進まなかった。これによって野口家の没落はいとめられたが、野口雨情は酒にひたつた。それでも彼は文学を研さんする。この時、彼は雨情と号した。明治三八年彼は潮餐会を作った。雨情は「枯草」を水戸で明治三八年（一九〇五年）に出版した。彼は詩人として世に出てようとしたが、本は売れなかった。二人の間に長男が生まれた。

彼は一旗あげようとして、一九〇六（明治三九）年に故郷を出た。樺太のコルサコフ（当時の大泊）へ、芸者と一緒に行った。だがその芸者にお金を持ち逃げされてしまったのである。雨情は、残った金で一儲けしようと、りんごを一貨車買つて東京に送つて売ろうとしたが、りんごは腐ってしまった。こうして失敗した。彼は東京で困窮したが、迎えにきた妻に、東京に留まつて詩人になると宣言した。明治三九年（一九〇六年）のことであった。そして明治四〇（一九〇七）年から明治四二（一九〇九）年にかけて、新聞記者として北海道を転々とした。というのは新聞通信員として北海道へゆき、そのままどまってしまうのであった。しかしその生活は苦しかった。雨情は札幌の「北鳴新聞」社に社会部記者として入った。小国露堂が知人だった。啄木は函館時代に、雨情が「北鳴新聞」に行ったことを、雑誌で読んで知っていた。野口夫人・ひろも子供をつれて札幌へやってきた。

こういう時に、啄木が露堂の紹介で「北門新報」の校正係として入ってきたのであった。啄木によると、札幌には新聞が三つあり、第一は『北海タイムス』、第二が『北門新報』、第三は『北鳴新聞』で、発行紙数は、北海タイムスが一万以上、北門が六千、北鳴は八、九百（？）という噂であった。当時、野口のいた北鳴新聞は休刊中であつた。これは一二日に北海道新聞となつて出たが、また休刊した。啄木を北門新報に紹介したのは、小国露堂であつて、啄木と同県の人である。小国はその後、「釧路新聞」の編集長になるのであった。啄木が入社して五日目に小国がきて、「今度小樽に新しい新聞が出来る。その方へ行く気はないか」と言つた。よし行こうということになって、いろいろな秘密の相談が成り立つた。その新聞には野口雨情君も行くのだと、小国が言う。「どんな人だい」と聞く

と、「一、二度逢つたが至極温和い丁寧な人だ」と言う。

石川啄木は、札幌の北一条西十丁目幸栄館の小国の室で、野口雨情と会った。「北鳴新聞」はライバル紙であった。この時、雨情は二五歳、啄木は四つ年下だった。啄木は、「北門新報」の校閲担当者として雇われて、一週間目であった。「北鳴新報」も「北門新報」も経営不振であった。

啄木は、明治四〇年九月二三日の日記で書く。二三日の「夜小国君の宿にて野口雨情君と初めて逢えり。温厚にして丁寧、色青くして髭（此でなく再）黒く、見るからに内気なる人なり。共に鮪のサシミをつついて飲む。」他の場所でも、啄木は書く（「悲しき思い出」。「生来礼にならぬ疎狂の予は少なからず狼狽した程であった。〔野口は〕気障もない厭味もない、言葉から挙動から、穏和いづくめ、丁寧づくめ、謙遜づくめ、デスとは言わずにゴアンスと言って、其度些と頭を下げるといった風、風采はあまり揚がっていなかった。イをエと発音し、ガ行の濁音を鼻にかけて言う癖が耳についた。小樽行きの話が確定して、鮪の刺身をつつき乍ら俗謡の話などが出た。酒は猪口で二つ許り飲まれた様であった。予は三つ飲んで赤くなる。小国君も下戸。」

野口ともう一人が伴つてそこへ来ていた。十二時ころ伴つて帰った。「予は早速野口君を好人だと思つて了つた。」と啄木は書く。二人はただちに意気投合した。この日から毎日のように行き来した。九月下旬には二人とも札幌から小樽に転居するのだった。一〇月一五日に初号を出すことになっていた「小樽日報」の創刊に、露堂の世話で、こうして二人は加わることにした。

その後、啄木は一度、野口の宅を訪問した。小樽の新聞の主筆になるという某氏（＝岩泉）の事について、ある不平があつて、雨情は非常に憤慨していた。事によつたら断然小樽行きをやめるかもしれぬ、と言う。啄木は腹の中でそんなことはないと思ひながら、これは面白い人だと思つた。「予は年が若いから、憤慨したり激語したりする人を好きなのだ。」

第六節 三度目の来樽

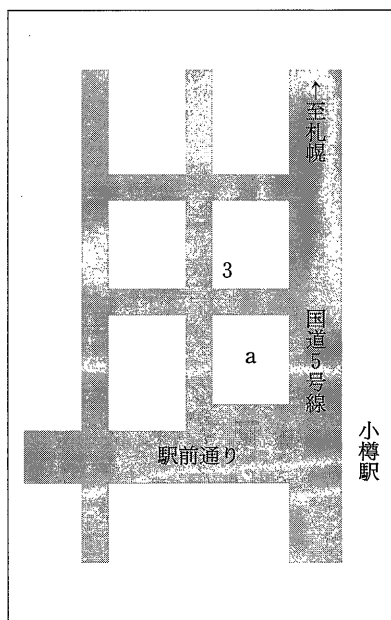
1 『小樽日報』

九月二三日、啄木の『小樽日報』入社が決まり、月給は二〇円であった。啄木は札幌を去り、二七日に小樽へ来た。結局、札幌で勤めたのは一〇日ほどにすぎなかった。啄木と札幌との「関係はわずか二週間で終わりをつけた」。九月二七日に、逆に札幌からの汽車で帰る時、彼はこう書く。「錢函をすぎて千丈の崖下を走る」。啄木は、初めは家族を札幌に呼ぶことになっていたのであるが、呼ぶ必要がなくなった。

九月二七日、「北門新報」の給料の日割が六円入った。本来は月一五円であった。

啄木は、九月二八日に小樽日報社（地図参照）へゆき、主筆岩泉江東に会った。新聞社は稲穂町にあった。そして、「小樽新聞」の緑川（正しくは、碧川）——後述——を訪れた。三〇日に野口が小樽に来た。野口雨情と啄木は、一〇月一日に開かれる「小樽日報」の編集会議にそろって行き、参加した。社長・白石義郎、社主の代表・中村定三郎にあった。雨情と啄木二人は加速度的に親密になっていった。

啄木と野口雨情の二人は共に第三面を受持つことになり、他の一人は、外交専門の西村が決まった。月給も共に二〇円（一二円とある場合もあるが、二〇円が正しい）ときまつた。この新聞は、企業家としては随分名の知れている山県勇三郎が社主、あるいは出資者で、その弟で、小樽にいる敏腕の聞こえ高い中村定三郎が社主を代表した。社長は、時の道会議員、老巧な政客白石義郎（一八六一—一九一五）であった。彼は福島県選出の代議士だった。翌年、根室郡部から出て代議士になるのであった。編集は主筆以下八名であった。そして編集会議を開いた。集まったのは、社長・白石、主筆・岩泉、野口雨情、佐田鴻鐘、金子孤堂、野田黄州、西村樵夫、宮下などであった。岩



a は、現在 ナガサキヤ。

泉は札幌の「北鳴新報」から来た。つまり野口の勤めていた新聞社である。事務関係は、事務長小林寅吉、以下、窪田、畑山、在原などであった。この第一回の編集会議で、紙面内容が討議された。

『小樽日報』はしかし、翌明治四一（二九〇八）年四月に廃刊になるのであった。白石は、明治三一年（一八九八年）、先輩・杉田定一が道庁長官になると、道庁に入り、釧路支庁長になった。しかし杉田の退官により、辞職した。明治三三年に初代釧路町長、明治三五年五月に「釧路新聞」社長、明治三七年に道会議員、明治四一年に、衆議院議員に当選した。

当時の小樽日報社は3の地にあった。

この会議が済んで、社主の招待で、ある洋食店に行く途中、夕方、名高い小樽の悪路を肩を並べて歩きながら、野口と啄木は主筆排斥の陰謀を企てた。編集の連中が初対面の挨拶をしたばかりの日、誰がどんな人やら知らぬのに、随分乱暴な話であった。主筆を野口は以前から知っていたが、啄木は知らなかった。最初「彼奴何とかしようじゃありませんか」というような話であったこの陰謀は、二、三日のうちに立派な理由が三つも四つも出来た。二人の密議が著しく進んで、四日目あたりになると、編集局に多数を制するだけの味方も得た。その目的はもう一人とともに、一種の共和組織を編集局にしこうという頗る子供じみた考えであった。そう啄木は記す。野口は少しちがっていた。

野口雨情は三面の主任記者であり、啄木はその部下

で、記者としてのすべてを雨情から学んだ。彼は雨情とともに初めて出社した一〇月一日の啄木の日記に、こうある。「遠く聞ゆる夜回りの金棒の響は函館のそれよりも忙しげ也。小樽は忙しき市なり。札幌を都といへる予は小樽を呼ぶに『市』を以てするの尤も妥当なるを覚ふ。」

小樽は人口増加率がとても高かったし、函館火災後の「焼出され」がたくさん入り込んだので、貸家など皆無という有様だった。これは二人共少なからず困った。野口はそのころ、色内橋(?)の近所のある運送屋(?)に泊まっていた。啄木には幸い花園町に二階二室貸すという家が見つかった。義兄の家・中央駅の駅長官舎に止宿していた啄木家族は、一〇月二日に、母、妻、子とともに引越しをした。駅夫に大八車をひかせた。こうして花園町公園通り西沢善太郎方、二階、花園町一四番地に間借りした。二間は、六畳と四畳であった。西沢家は、南部煎餅屋であった。今の「た志、満」(たじま)の場所である。当時の家は改築され、今は柱一本だけが残っている。二階の二間は、六畳と四畳半であった、ともされる。妹は義兄の家に残った。

啄木の一〇月三日の日記によれば、「小樽の如き悪道路は、蓋し天下の珍なり。」とある。当時は道路が舗装されておらず、小樽の悪路は有名だった。

野口雨情は、啄木によれば、「革命の児」であった。雨情が排斥運動を起こしたのは、北鳴新報時代の上司でもあった小樽日報の主筆・編集長・岩泉の人格・技量などへの不満からであった。啄木は野口雨情の説に雷同して事を起こした。野口雨情は花園町の啄木の家に押し掛けて密議をこらす。雨の日などは夜更けると、そしてその話がまると、二人はふとんの中にもぐりこんで、お互いの身の上話と将来の野望を語り合った。結論はいつも「一旗あげるのには北海道では駄目だ、とうしても東京に打って出ないことには労して益なしだ」だった。明け方近くまで野口の経歴談をきいたことがあった。それは、札幌へくる前の年、樺太を放浪して生死の辛苦をなめたこと、などである。啄木は一〇月三日に書く。「野口君と予との親交は既に十年の友の如し。遠からず共に一雑誌を経営せんこ

とを相談したり」と。

一〇月九日には、小樽商業会議所の新築落成式があつて、啄木はその式に出席した。

函館の親友・宮崎郁雨が、一〇月一二日、旭川の演習地から休暇をとつて、啄木を小樽に訪ねてきた。彼は啄木宅に一泊した。この時、郁雨は啄木の妹・光子を見て、僕にくれないかと、啄木に頼んだが、啄木は拒否したのであつた。ちなみに、光子は盛岡女子学校の卒業であつた。

一〇月に小樽日報の給料二〇円が入つた。十一月一三日に啄木は宮崎郁雨から借金をした。だがその額は分らない。もちろん啄木は借金は返せないから、返さないのであつた。

啄木の行きつけの床屋は、江戸屋といい、公園通り、現在の吉乃屋の所にあつた。ある時、啄木は二銭銅貨大のはげ二、三箇所を頭に発見した。ちょうど来樽中の郁雨も、その床屋で散髪したので、二人とも不安になり、公園通りの桜井医師の診察をうけた。啄木のそれは、伝染性の鬼頭病であり、ほつておくと坊主頭になるといふので、早速手当を受けた。

一〇月一三日に、「野口君の移転に行きて手伝う。野口君の妻君の不躰と同君の不見識に一驚を喫し、慙然に不堪」。啄木は書く。一〇月一五日には、「帰りは野口君を携えて来り、共に豚汁をすすり、八時半より程近き佐田君を訪れて、小樽に来て初めての蕎麦をおごられ、一時頃再び野口君を連れてきて同じ床の中に雑魚寝す。」

「社の岩見江東氏を目して予等は『局長』と呼べり。社の編集用文庫に『編集局長文庫』を記せる故なり。局長は前科三犯なりという話出で、話は話を生んで遂に予等は局長に服する能はざる事を決議せり。予等は早晚彼を追いて以て社を共和政治の下に置かむ。」

啄木は続ける。「野口君より詳しき身の上話をききぬ。かつて戦役中、五十万金を献じて男爵たらんとして以来、失敗又失敗、一度は樺太を流浪して具さに死生の辛苦を嘗めたりとか。」この雨情の話は、野口の叔父・北巖が代議

士だったころ、雨情は家産が傾いた償いに、受爵して先祖にむくいようとした。日露戦争のころ、多額の献金をすれば、男爵は受けられると、ひろ夫人に金策を相談した。五〇万円をひろ夫人の実家から引き出そうとした。これはひろ夫人が反対したので、沙汰やみになった。

啄木はさらに続ける。雨情は「その風采の温順にして何人の前にも頭を低くするに似合わぬ陰謀の子なり。自らいわく、予は善事をなす能はざれども悪事のためには如何なる計画をもなしうるなりと。時代が生める危険の児なれども、其趣味を同じうし社会に反逆するが故にまた我党の士なり焉」。時に雨情二六歳、啄木二三歳である。野口雨情は実に礼儀正しく人との応対などは極めて丁寧だった。

一〇月一五日に、予定の通り、『小樽日報』初号が出た。楽隊を先に立てて市内を配達して回った。十八頁物であった。『小樽日報』創刊号社説を、啄木が書いた（琴坂）。この日、精養軒で祝宴が張られた。

一〇月一六日、啄木は日記で書く。この日重大なことを発見した、と。雨情の主筆排斥運動が、自分たちと主筆を離間させ、雨情が中間にたち、自分だけうまい汁をすう、と。啄木と佐田と西村はそう考えて怒った。しかし雨情は誤解されたのであろう。一八日に雨情が詫言を入れ、結局、啄木は許した。

しかしこの主筆排斥運動は露見して、主筆がそれを知り、赴任一カ月も経たない一〇月末、首謀者の野口雨情がまず檜玉にあがって首を切られることになった。彼は一カ月の勤務にすぎなかった。一〇月一八日に「この日野口君札幌なる細君病氣電報に接して急行せり」と。ひろ夫人は長女みどりを妊娠中であつた。だが札幌で生まれた長女を生後八日でなくしている。後に雨情は、それを「しゃぼん玉」で歌に書く。しゃぼん玉が「……こわれて消えた」の部分である。これは娘を象徴していて、悲しい詩である。

一〇月二四日に、啄木は小樽区長・椿を訪ね、教育談をした。一〇月三〇日、啄木は、同紙の三面責任者になり、月給が二五円となった。一〇月に比べて五円あがつたのである。野口が退社したからではないだろうか。

野口雨情は三一日に退社し、札幌に戻り、「北海タイムス」(後の北海道新聞社、最近まであったものとは違う)の記者になった。まもなく旭川の本局へ行った。一方、野口雨情は早稲田詩社の運動に加わった。野口雨情が去ってから社長は主筆・岩泉を罷免した。この主筆は、十一月に退社する。

野口雨情は、後に、室蘭新聞社、胆振新報社と移り、旭川の北海旭新聞社を最後に離道した。彼の二年二カ月の北海道生活は、札幌、小樽、室蘭、旭川と移り、勤めた新聞社は六社になる。その雨情が帰郷したのは明治四二年末であった。⁽⁸⁾ 啄木は雨情から、新聞編集上の技術や記事構成などの知識をも得た。「予の現在有つてゐる新聞編集に關する多少の知識も野口君より得たる事が土台となつてゐる。」「(悲しき思い出)と書くように、啄木のジャーナリストとしての本格的出発は「小樽日報」であつた。啄木が多数書いた三面記事は、『啄木全集』に残された。三面記事であるから、小樽での雑多な事件の取材録である。

小樽の西沢家の二階に部屋を借りて、啄木たちは生活を始めたが、襖一枚へだてた隣の部屋に、天口堂という易者・海老名又一郎が住んでいた。彼は啄木の手相を見た。

泣くがごと 首ふるはせて

手の相を 見せよと いひし

易者もありき

啄木は、「天口堂主人より我が姓名の鑑定書を貰ふ、五十五歳で死ぬとは情けなし」と日記に書いた。⁽⁹⁾ だが啄木の人生は、何とその半分ではなかつたのである。

2 歌壇

啄木は「小樽日報」初号から「藻しほ草」という歌壇を起こしている。「何分、新設の小新聞なので投稿が一首もなかったのか、さも投稿があったかの如く、高見青風、橘りう子、田中島月、山田西州、小高草影、緑衣生、などの変名で掲載した。その後、おいおい、実相寺一二三、高田紅果、吉野花峯、荘内溪月、片尾白眼、新人」などの投稿があった。一二三は、信男であり、高田、吉野、荘内、は実在し、新人は塚原辰吉である。⁽¹⁰⁾

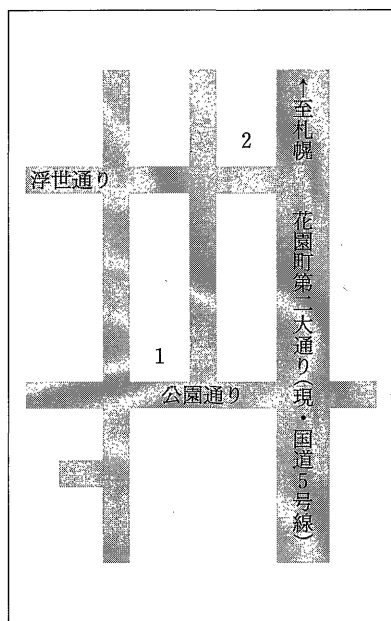
3 転居

啄木の義兄・山本駅長は一月五日付けて、岩見沢駅長として赴任した。こうして姉は小樽を去った。

一月六日に、啄木一家は再び転居した。花園町畑一四番地である。(図の1から2へ移った家主は秋野音次郎であり、「今の浮世通り」にあった。二階で八畳が二間であった。畳が一部屋しか入らなかった。この家こそ、大硯、露堂、天峯、寒雨、荊南、鴻鐘、などが訪れた所である。高田紅果(後出)の印象記によると、角の荒物店のすぐ後ろの一戸建ての平屋で——二階家という説と、ここのように平屋という印象記の二つがある——、玄関には二枚のガラスはめの引戸が立ち、左側は九尺の格子がはめこんで、落ちていたしもた屋(普通の家、という意味)風な住宅だった。踏み込むと一坪の玄関土間が板張りになって、その片隅に、木炭の俵が口を開けたまま、どっかりと置いてあり、突き当りのお勝手との間仕切りには、まだ障子も硝子戸も立ててなかった。

4 高田、藤田、塚原

小樽に高田紅果(ペンネーム)がいた。高田は、明治二四(一八九二)年二月、小樽に生まれた。本名は、高田治作である。小樽郡色内町の出身で、一人息子だった。彼は、お洒落で気の弱い、しかも我ままな、いわゆる坊や



一〇月一日に、宮崎郁雨は、啄木に会った。彼は函館の同人である。旭川での演習の暇を利用して、小樽に啄木を訪れたのであった。啄木は日記に書く。「夜社にあり、妻迎えにきて帰れば、思ひがけぎりき、宮崎君来てあり、再逢の喜び言葉に尽く、ビールを飲みて共に眠る。我が兄弟よ、と余は呼びぬ。誠に幸福なる一夜なりき。」これを啄木は歌にしている。

演習のひまにわざわざ

汽車に乗りて

訪ひ来し友とのめる酒かな

育ちだった。量徳小学校を卒業し、私立の商業学校（私立小樽商業学校）に学び、講義録で勉強して卒業証書をとったという勉強家であった。小樽には、明治二八年から三〇年まで商業学校が存在していた。その後、私立小樽商業学校が、明治三四（一九〇一）年に乙種として創立された。前者と後者の関係は不明だが、同じ経営主体ならば、改組設立と言えるだろう。後者は、花園一六番地にあったが、明治四〇年に緑町に移った。庁立小樽商業学校が創立されてから、私立北海商業学校と改称した。現在の北照高校の前身である。

（『一握の砂』より）

啄木は九月二八日に小樽日報に初出社して、翌一〇月二日には早くも二円の前借をして、姉婿山本千三郎方から花園町の南部煎餅屋の二階に移った。八日にはさらに一〇円の追いかけ前借をした。宮崎は、ここで大いに飲み食いをして、他念なく快眠した。だがその後、宮崎は、あれが啄木の前借りによる御馳走だったのだと分かり、鈍感だったと思うのである。

高田紅果は、明治三九（一九〇六）年二月、一六歳の年に、保険代理業奥田商会に入社した。後年その代表者となった。彼はすこぶる多方面の趣味人で、碁、将棋、玉突、謡曲、小唄、洋画、スケート、何でもござれであった。少年時代から文学に熱中していた。『東京社会新聞』を高田は読んでいた。明治四四（一九一一年）年に入営した。彼は社会主義文献を購読した。在営中、反軍短歌事件を起こした。そこで思想要注意共產主義とされたので、特別高等警察が彼を訪れたのであった。実際はたいしたことなかった。高田は、一九五五年（昭和三〇年）に亡くなった。

彼は、明治四〇（一九〇七）年一月初旬に、初めて石川啄木に小樽で会った。小樽の啄木の浮世通りの宿で、であった。当時は紅花と号していて、後に紅果としたのは、土岐哀果の影響だろう。その土岐は、本名が善麿（一八八五〜一九八〇）で、啄木と知り合い、生活派の歌人として活躍した。高田は、「秀才文壇」とか「文章世界」（博文館）を読んでいた。当時一八歳（一七歳）であった。彼は何回か啄木を訪ねた。「小樽日報」に歌壇が設けられ、啄木がその撰をしていた。高田はそこに熱心に歌を投じた。

当時小樽市内の雑穀商浜名商会の見習い店員であった藤田南洋が、初めて啄木に会ったのは、一一月二〇日だった。彼は、本名が藤田武治（一八九一〜一九三八）であり、筆名が南洋である。創刊当時の小樽日報社で見習い記者を募集していることを、図書館長になった寺田から、高田紅果が聞いたので、藤田南洋（武治）に伝えたのであった。藤田は、商家の店員見習いに興味を失って、好きな文筆生活の修業をしたいと思っていた。石川啄木が小樽日

報社に在るという噂を高田から聞いて、藤田は面会を求めて宿で啄木と会ったのであった。

藤田南洋は、常に悩み苦しんでいた死の恐怖について、心境を吐露して啄木の示唆を乞うた。啄木は別に宗教的な解決も哲学的な答案も与えてくれなかったらしい。信仰についても考えていなかったらしく、現代の思想の対立として、ニーチェの自己発展説と、トルストイの愛他説があることを説き、人間は魂において相通するものがある、と語った。つまり新聞記者の筆と、純文芸の筆とは全然いれぬものがある。記者生活は決して文芸の道場たりうる処にあらずとして、藤田は、見習い記者志望を断念させられたのだった。¹²⁾藤田南洋は、啄木の印象を、「別に頭髮も長くしていない、髭も生えていない、眼鏡もかけていない、坊主頭の二介の書生にすぎない」と、高田に報告した。啄木は、後に藤田を歌う。

あをじろき 頬に涙を光らせて

死をば語りき

若き商人

藤田南洋の訪問後、高田紅果と藤田は連れだつて、啄木を訪問したわけだ。それは明治四〇（一九〇七）年十一月だった。啄木は、高田を弟のように可愛がり、その後も文通している。高田はその時一七歳であった。

高田紅果は、啄木の家と啄木について書く。「玄関から入った土間の左側に、六畳の茶の間があり、茶の間の格子窓のすぐ下の囲炉裏の前で、啄木は木綿の黒の紋付の羽織を着て座っていた。五分刈の坊主頭で、色白の顔はいかにも若々しく、こどもらしい稚氣にみちた顔である。おでこの広い前額は聡明をおもわせ、つぶらな眼は野心にみちた負けぬ氣を示し、全体を通して何とも言えぬ人なつかしさを……与える魅力にみちたもの」、であった。

この夜の啄木の話題は、新詩社の近況とか、函館を焼け出されたことで、小樽にも紅うまごやしのような文学グループを育てようという示唆もあった。とにかく西欧の詩壇の傾向、殊にフランス象徴詩人のグループの傾向など、その内でもヴェルハレーンの「鶯の歌」に表現された、象徴詩の新風は、詩壇の最新の傾向として注目すべきを説いた。シヨールペンハウワーの悲観哲学論、ワグナーの楽劇の構成の偉大さなど、もであった。啄木は、「小樽はどうも歌をやる人が少ないね」と、度々言った。「春になったら新聞で呼びかけて、短歌大会というような集まりを、一つやつてみようか」とも言った。啄木は、高田紅果をも歌っている。紅果を詠んだ歌は、「一握の砂」にある。

あはれ かの眉の秀でし少年よ

弟と呼べば

はつかに 笑みしが¹⁶

高田紅果はその後も、『東京社会新聞』などを購読する。高田は、後に短編小説「借間」を『秀才文壇』に出し、入選した。高田は、大正期に小樽で発刊された文学雑誌『海鳥』『白夜』『群像』などに、小説、評論、翻訳などを発表している。彼はフランス語を天主教教会のフェルゴット師について習った。

大正六、七年ころ、小樽の進歩的インテリ連が、思想的文化的団体「啓明会」をつくり、北大や高商の教授などを招いて時々講演会を開いたが、高田紅果はその世話係をつとめた。当時「啓明会」は、特別高等警察から要注意として絶えずにらまれていた。啓明会で活躍した小樽高商の教師は、大西猪之介¹⁸である。

啄木がこの時にいた家については、こうである。「十一月六日花園町畑十四番地に八畳二間の家を借りて移る。」

(啄木) 宮崎郁雨は書く。「この家は私「Ⅱ宮崎」が旭川での勤務召集を終えて小樽へ立ち寄った時、京ちゃん「啄木の娘京子」をおんぶした節子さんと二人で探し歩き、小樽の親戚から一時借りした金を敷金に入れて貸して貰った¹⁹⁾」。

日は分らないが、宮崎は休暇をとって小樽にきたことがあり、またその後、勤務召集を終えて小樽に立ち寄ったことがあるということになる。ここでいう、小樽の親戚というのは、姉夫婦のことであろう。郁雨が家を借りに奔走したのは、小樽日報が初号を出したところで、啄木は忙しくて幾日も帰らなかった。また郁雨が家を借りてやり、金を貸してやつてりしたが、啄木は、畳や建具を買ったりして大変だったと、知人に手紙を書いているので、郁雨は、迷惑な負担をかけてしまったかもしれないと、反省している。²⁰⁾

郁雨と、啄木の妹光子との関連についてはこうだ。

啄木が函館にくる時、妹光子が来て、彼女だけ、姉のいる小樽に厄介になることになった。姉は函館まで妹を引き取りにきた。その後、光子は脚気のために転地する必要ができ、函館へ戻った。郁雨はそのことを旭川にいる時に知った。そこで脚気の薬を送った。

郁雨は、機動演習中の休日を利用して、江別から小樽まで出かけて行った。その時、外泊区域外の小樽へゆけたのは、理解ある上官のお蔭であった。短い秋の日がたそがれようとする頃、今の南小樽駅で下車した私は急いで山本千三郎氏の家を尋ねた。稲穂町畑十五番地の鉄道官舎は、案外たやすく見つかった。ほっとした気持ちで玄関に入ると、赤っぽい様な着物を着た小柄な若い女性が出てきて、丁寧にお辞儀をした。「石川君居られますでしようか。宮崎です。」という「ちよっとお待ち下さい。」と明るい笑顔を残して引つ込んで行った。動作と音声の若々しさが印象に残った。ほんの十秒くらいの間だが、宮崎にはそれが光子さんだとはつきりわかった。宮崎はそれまで光子にあったことはなかったのである。彼女はそれきり出て来なかった。代わって出て来たのが山本夫人(Ⅱ姉)で

あつた。

「石川では月初めに花園町の方へ越しまして」と、新居の番地と西沢という家主の名、それから乗って行くべき乗合馬車の乗車下車の場所などを、親切に教えてくれた。宮崎は啄木の家についた。啄木を新聞社に迎えに行った節子は、宮崎が来たとはわざと知らせず、ただ来客とだけ告げた。だから宮崎の顔を見た瞬間の啄木の驚きと喜び方は非常であつた。節子は居常端然としていて多く語らず、ちよつと馴染みにくい人のように見えたが、こうしたいはずらつぽい一面をもっていたようである、と宮崎は書く。

快く酔つた宮崎は、ひごろもつていた気持ちに彼にうちあけた。「光子さんを僕にくれないかなあ」と。彼の母(初めてあつた)と節子はそばで微笑しているだけだったが、啄木は彰かに当惑したような顔をした。そして彼は無言のまま強くかぶりを振つた。「駄目か」と宮崎は大声で笑つた。ひどく物寂しかった。除隊後、宮崎は再び小樽を訪れた。その時、もう光子の話はしなかつた。

その後、啄木は、郁雨に手紙を書いた。「妹を札幌の鉄道管理局へ奉職させた所が、また今日脚氣になつて帰つてきた。これには閉口。夏に貰つた妙薬を……一週間分許り恵んでくれ給え」(二月一三日)。

小樽時代の啄木に師事したのが、塚原辰吉である。彼は後に、啄木一周忌集会を主宰した。そして大逆事件後、当局の尾行をうけた。歌人であり、ペンネームは花骸である。⁽²⁾

さて啄木の周囲では移動があつた。沢田天峰(信太郎)は、函館の「紅うまごやし」同人であつて、函館大火後、札幌に移つて、道庁の役人になつてゐた。啄木は、岩泉の後、この沢田を主任にもつてきた。十一月二三日に、彼は赴任した。

啄木の住居は三間で、奥の一間には、啄木の斡旋で一方の主筆に迎えた沢田天峰がいるようになった。沢田は、母とともに来た。彼は、啄木の生活を、見るに見かねて援助したらしい。啄木は、外では巻煙草をすい、家ではき

ざみ煙草を長いキセルで吸っていた。経済的理由らしい。啄木は函館を離れてから身辺の寂寥を感じ、しきりに函館の同人を小樽に呼ぼうとした。後に上京しても、函館の友人をしきりに上京するよう誘った。

5 桜庭先生

小樽に桜庭ちか子という人がいた。啄木は明治四一（一九〇八）年一月九日の日記に、彼女のことを書いた。石川啄木が『小樽日報』記者として「三面をやっていた時、たしか昨年『明治四〇（一九〇七年）拾月末の頃であったと思ふ、三面に入れる挿絵を此人に頼む事になって、其以後二三回逢ったのであったが、予『啄木』の知る限りに於て最も善良なる婦人の一人である。」と。その人である。続いて啄木は書く。「女史『桜庭』は今歳二十五になった。区役所にいる学事の桜庭保君の異母妹で今潮見台小学校に教鞭を採って居られる。天性画が好きで、所謂才色兼備の、美しい、品格のある婦人」である。⁽²²⁾

啄木が誉め上げたこの美人教師は、後に小林多喜二の入学するこの小学校に勤め、小樽の真栄町（まさかえちょう）に住んでいた。啄木は、彼女に恋をしていたのではない。啄木のいといい人は、函館時代の女教師・橘智恵子である。啄木は彼の友人・沢田信太郎と彼女・桜庭とを結婚させようとして、奔走している。彼女の下宿先まで行っている。本人の内諾をえたが、彼女の母の反対でまともになかった。彼女は、父が、北海道士族松前藩士・庄太郎で、松前子爵の家令であり、母は栄といい、松前波響の五代目の子孫で、才媛だった。チカは明治一七年一月三日、函館市元町七一番地に生まれた。函館私立幼稚園、函館区私立元町小学校に入学、二七年四月函館区女子高等学校へ編入し、同年小樽へ移り、六月二五日小樽郡公立量徳尋常稿高等学校へ編入し、三一年三月二八日卒業した。「学年試験及び平素の成績を考查し甲賞を授与す」と賞せられた。三三年六月二六日小樽区から同校の雇を命ぜられ、月俸八円だった。その後四〇年五月二三日北海道庁の発令で、同区潮見台小学校訓導専科正教員となった。⁽²³⁾

その後、チカ子は二八歳で郵船の船長と結婚し、上京したが、離婚した。その後、曲辰（川かねたつ）鈴木重役宮尾麟と再婚した。晩年幸福に暮し、神奈川県くげ沼で、六六歳で亡くなった。

さて小林多喜二は、明治四三（一九一〇）年、つまり啄木の記した二年後にこの同じ潮見台小学校に入学したのだった。その桜庭先生は、絵の先生だったかもしれない。さて、多喜二はこの桜庭先生に教わったのだろうか。

多喜二が入学した時、明治四三（一九一〇）年の時点で、潮見台小学校の先生は、次のようだった。校長（初代）有賀光雄、以下、吉田利吉、滋谷孝三、高田和三郎、山田外喜雄、佐久間ミユキ、山田次枝、工藤ノエ、高氏キクノ、桜庭チカ、北野清四郎、近藤昭輔、久保田庸、寺田秀城、山本とよ、高橋丈夫²⁴である。なんと桜庭先生は、ちか子でなく、チカとなつてはいるが、在職中であつた。チカが本名であろう。彼女は明治四〇年度から四四年度まで、明治四五（一九一二）年六月まで、潮見台小学校にいた。退職は「明治四五年四月一八日小学校令施行規則第百二十二条第一号により休職を命ず」とある。²⁵小学校は担任制だから、担任でなければ多喜二は教わらなかつただろうが、もし、彼女が多喜二の担任となつたり、絵の先生であれば、彼女に、一、二年生の時、一年か二年間、教わつたことになる。多喜二の姉・チマも教わつたであろう。ここでも多喜二と啄木の因縁がある。

啄木の友人となつた奥村寒雨（茂俊）は、初め小樽区役所に勤めていたが、一月に「小樽日報」に入社した。寒雨は、とくに啄木が退社後に、つまり浪人時代に親しかつた。啄木は、天峯に、「共に為すあるの人にして、然も其人物性行大いに吾人の意を得たり」と、寒雨について書いている（明治四〇年十二月二六日）。

「啄木が沢田天峯を小樽日報に迎えたり、彼の結婚に熱心な斡旋をしたのは、函館時代の交誼に応える心からだろう」と、宮崎は書く。

しかし後に、釧路時代に、啄木は宮崎あてに手紙を書いて、沢田を論じている。「沢田君は矢張当世才子の少し気のかえたやうな人間だ、アノ男には男らしい節操がないから面白くない」²⁶。また、上京することになって、家族引越

しのため小樽に行った時に、「沢田君来る。いくら努めても合わぬ人とは矢張合わぬ」と日記に書いた。小樽の藤田南洋と高田紅果にも「沢田ナンカ馬鹿ダヨ」と書いた(明治四一年九月九日)。啄木の沢田天峯に対する不満は、天峯が入社に際して約束した人事の改革を行なわず、かえって保身のために妥協したということにあった、と宮崎は聞いた。⁽²⁾

6 退社

「小樽日報」の事務長は、小林寅吉であった。彼は、明治十二(一八七九)年福島県生まれで、東京専門学校法律科卒業であった。警視庁巡査になった後、小樽駅助役をへて北海道庁に入り、北海タイムス社長山口の世話により、また白石義郎により、『小樽日報』の創設に関係し、事務長となった。

「小樽日報」も沢田編集長を迎え、編集の刷新をはかったが、小林事務長などが職務以外のことに奔走し、その結果、営業部の成績があがらず、社主社長も工場設備に期待したほどの投資をしなかったので、啄木も嫌気がさしてきた。

一月一二日に、啄木は社内で、この事務長の小林寅吉に腕力(＝暴力)を振るわれた。その理由の一つは、啄木が文学で生活しようと思うあまり、札幌に無断で何日か行ったからである。また他の説は、札幌に中西代議士による新しく有力な新聞の発行計画があると聞いて、これに食指を動かして接近し、さつそくその話に乗った、というものである。⁽³⁾ そのために啄木は、度々札幌を往復していた。他の理由は人事問題であった。『小樽日報』の初めの主筆岩泉江東を、啄木が排斥して追い出し、友人の沢田信太郎を後任にすえたため、小林は、啄木を陰謀の張本人として憎んでいた。⁽⁴⁾ それが背景にあった。

事の次第はこうである。啄木は、一月一日、編集終了後、札幌に出かけて行き、次の日は無断欠勤した。一

二日夕方、小樽へ帰ってきて、新聞社に立ち寄った際、啄木と小林が争論になり、小林が腕力を振るった、というものだった。啄木は帰宅し、「今 小林に社で殴られてきた。僕を突き飛ばして置いて足蹴にした。僕は断固退社する。アンナ畜生同然の奴とどうして同社できるものか。」⁽³⁰⁾啄木はそれで、新聞社を辞めることにした。それに彼はこの人事のゴタゴタで嫌気もさしていた。啄木は、郁雨に、事務長と喧嘩をして日報を退社するという手紙（一二月一三日）を書いた。郁雨は、啄木の感情の暴走ぶりに嫌気を感じ、行動の軽忽さに不満であった。

二一日、啄木の退社の広告が出た。しかし、かの札幌の話はうまくゆかなかった。そのため、辞めた啄木には生活のあてがなくなってしまった。失業した啄木を心配して、露堂は来樽を重ねた。

一二月三〇日に「小樽日報」の給料日割一六円六〇銭が入った。同日一〇円が退職慰労金としてさらに出された。啄木の家の小樽での生活は、一二月二〇日から無職となったので、悲惨を極めることになった。大晦日には、妻の帯や母と啄木の衣類を質入れし、四円五〇銭を入手し、掛取りに渡した。

小樽日報退社の原因となった、事務長小林寅吉についても、啄木は後年、二首詠んでいる。

殴らむといふに

殴れとつめよせし

昔の我の いとほしきかな

あらそひて

いたく憎みて別れたる

友をなつかしく思う日も来ぬ

小林寅吉はその後、明治四一（一九〇八）年六月、北海道庁衛生部警部となり、朝鮮総督府警部、警視庁警部となった。その後、福島県選出の代議士となり、中野家の女婿になり、中野寅吉として衆議院議員となつて、帝国議會で寅寅の勇名をとどろかせた。

啄木は、新聞社をやめたことでも、困らぬといわぬばかりの態度で、例の負けず嫌いの昂然たる様子を示していた。だが啄木家族は、正月に、門松もしめかざりもなかった。一月二日には、「断髪に行つて一九銭とられる。アト、石油と醬油を買へば一文もない」と書く。

年が明けた「小樽日報」新年号に、高田紅果の「吹雪の夜」が地賞に入選した。高田の歌は、啄木が作つた「小樽のかたみ」⁽³¹⁾に一八首入っている。藤田の詩も、同新聞に載つた。啄木は、社を辞めても、新年の文芸の撰は任されていた。

7 社会主義演説会

北海道に、安部磯雄（一八六五～一九四九）⁽³²⁾が一八九八年に、片山潜（一八五九～一九三三）が、一八九九年、一九〇〇年、および一九〇三年一月に、演説をしにきた。安部磯雄は、早稲田の教授になり、一九〇一年に、幸徳らと社会民主党を創設した。キリスト教社会主義を広めた人である。片山は、渡米して勉強した。帰国後、労働運動で活動し、社会主義の立場をとり、その後、幸徳たちと袂を分つた。一九二一年に、モスクワでコミンテルンの常任執行委員となった人である。『自伝』がある。

そのうち一九〇〇年の時には、片山が八月に、小樽商業會議所で演説会を開いた。⁽³³⁾さらに一九〇三年八月に、幸徳秋水（一八七一～一九一一）が北海道に演説をしにきた。その時、『小樽新聞』の碧川企救男（みどりかわ きくお）は、幸徳を一九〇三年八月に小樽で迎えた。⁽³⁴⁾幸徳は、本名、伝次郎、土佐の人である。自由民権運動に参加

した。中江兆民に学び、一九〇一年、堺利彦、片山潜、木下尚江らと、社会民主党を結成し、禁止された。日露開戦にあたって、堺、内村鑑三らと、『万朝報』紙上で、反戦を唱えた。その後、週刊『平民新聞』を創刊し、反戦と社会主義を唱えた。渡米してアナルコ・サンジカリズムの影響を受けた。大逆事件の首謀者と見なされ、死刑に処せられた。主著に、『社会主義神髓』、『帝国主義』などがある。

堺利彦（一八七〇—一九三三）は、明治・大正・昭和の社会主義者である。彼は、幸徳秋水、西川光次郎——後述——らと、平民社に集まり、『平民新聞』（一九〇三—〇四年）を出し、それが弾圧された後に、彼らは『直言』（一九〇五年）を、その後継誌として明治三十八年二月から九月まで刊行した。同一九〇五年三月に、碧川は、『直言』読者会を小樽で組織した。ここに集まったのは、大滝由太郎（米穀海産商）、滝谷竹太郎（郵便局巡視）、佐藤喜代治らである。この会は三月から七月までだった。一九〇五年六月に、直言読者会は、小樽区社会主義者野遊会をもよおし、港町（現、堺町）から勝納川上流まで、赤旗をにかけて七人で歩いた。³⁵

大滝由太郎（一八八五—）は、小樽出身で、大滝商店の子息であった。小学生時代に三陸大津波被害者に義援をした。直言読者会の中心の一人である。平民農場に出資した。滝谷竹太郎は、キリスト教信者で、大滝由太郎などと活動した。竹内余所次郎（一八六五—一九二七）に郵便配達夫の実状を訴えた。佐藤喜代治は、金融業者で、労働運動に助力した。後に一九二五年の小樽総労働組合の結成大会で議長をつとめた。

同じころ社会主義者西川光二郎たちが北海道遊説にきた。西川（一八七六—一九四〇）は、本来は、光次郎である。だが本人は光二郎と書くようになった。発音は、本来は「みつじろう」であるが、普通は「こうじろう」と呼ばれ、本人もそれを訂正しなかった。彼は、兵庫県、淡路島の生まれで、号は白熊である。中学時代にキリスト教徒になり、札幌農学校予科を一九〇六年に卒業し、同年上京し、東京専門学校（現早稲田大学）の英語政治科に学んだ。そして社会主義者になった。『毎日新聞』（現在のではない）で働き、『東京独立雑誌』へ移り、一九〇〇年に退社した。そして

『東京評論』を創刊した。明治三四（一九〇一）年五月一日、日本で初めての、社会民主党の結成に参加した。そして労働新聞社の『労働世界』記者となった。『日本の労働運動』を、片山潜と共筆で出した。その他に、『社会党』、『英国労働界の偉人ジョン・バアンス』（一九〇二年）、『人道の戦士・社会主義の父カール・マルクス』（一九〇二年）、『富の圧制』（一九〇三年）、『土地国有論』等を出した。しかしその後、雑誌『社会主義』を去り、片山から離れた。そして『二六新報』の記者をする。彼は社会主義協会の中心的メンバーであった。明治三六（一九〇三）年には、『平民新聞』が創刊され、翌年明治三七（一九〇四）年に、西川は平民社に入った。そして彼は主に地方遊説を行なった。明治三八（一九〇五）年に、彼は筆禍事件で入獄し、同じ一九〇五年に、『平民新聞』は弾圧により閉刊させられ、その一〇月に平民社が解散した。彼が、文子と結婚したのは、そのころであった。閉刊した『平民新聞』の後継として、『直言』が出た。西川は凡人社を作り、『光』を出す。そして明治三九（一九〇六）年一月、日本平民党を作った。それが日本社会党と合同する。その後、第二次『平民新聞』が一九〇七年に発刊された。一九〇七年十二月五日、西川は添田と二人で東北・北海道遊説に出る。これが、今述べたこの遊説のことである。その後、西川は、『東京社会新聞』を一九〇八年三月一日に創刊し、それは九月一日に廃刊となった。片山の『社会新聞』は、一九〇八年二月九日で暫時休刊し、その後復刊し、一九一一年まで続いた。西川は投獄され、一九一〇年（明治四三年）の出獄直後、社会主義から離れた³⁶⁾。

この西川たちの演説会が、小樽で開かれた。彼らが来たのは、『東京社会新聞』の一派が、主義の宣伝と党勢拡張に来道した（高田）という件である。小樽新聞記者、当時社会部長、碧川企救男（きくお）が、西川を呼んだ。

碧川（一八七七—一九三四）は、福岡県生まれで、東京専門学校に入学した。そこで西川と会った。彼と同じく英語政治科を卒業し、北海道に来た。一九〇〇年、『北海時報』の記者となり、東京へ戻り、再び来道し、『北海タイムズ』に入社した。キリスト教による結婚をし、一九〇二年八月、『小樽新聞』に移った。彼の入社により、同紙

は社会批判が中心となった。こうして彼は小樽で活躍する。彼は社会主義的論説を書くのだった。碧川は、一九〇七年九月二八日に、石川啄木の訪問を受け、一二月二五日に、西川光次郎の訪問を受けた。そして一二月二九日、札幌での社会主義演説会で演説をしている。

碧川企救男は、一九〇八（明治四一）年一月四日には、小樽区寿亭の演説会で演説することになる。その聴衆の中に、石川啄木、高田治作（紅果）がいた（後述）。二月に、彼は「小樽新聞」社会部長を止めて、上京した。そして「報知新聞」の社会部主任になる。その後、碧川は大震災後、再び小樽にきて、「小樽新聞」整理部長になった。一九二五（大正一四）年一〇月、小樽高商軍教事件⁽³⁷⁾のときには、記者にこれを積極的に調査しよう命じている。

碧川は、一九二七年に小樽を去り、京都へ行った。碧川は、ペンネームとして、紅雨楼、時に、堀草人、その他を用いた。特要乙号社会主義とされる。夫人は、婦人参政運動に参加した。⁽³⁸⁾西川光次郎、碧川の二人は、東京専門学校の同学年生であった。

小樽の寿亭で西川光次郎の演説会が、明治四一（一九〇八）年の正月、一月四日に行なわれ、その際、碧川も演説した。寿亭は、一〇〇人も入れば満員になる小亭で、一九〇三（明治三六）年、庄山恭平が創立した寄席であり、その後、寿館と名前が変わっている。（その場所はおかつての電報局の所にあった。）この時、高橋鷹蔵は西川の講演を支援した。高橋は、新潟出身で、牧師である。熊本教会時代に西川光次郎の活動を支援し、のち小樽に移った人である。

その演説会へ啄木が来た。それを取材しに、とされている。だが年譜からみて、取材ではないであろう。もう新聞社を辞めていたからである。だから個人的興味によって参加したのである。露堂も聞きにきた、という説もある。その時彼は、社会主義について西川に聞いた。後に、より社会主義思想に傾く石川啄木にとって、これがきっかけを与えたとすれば、小樽時代は大きな意義をもつものとなろう。啄木は西川たちの演説を聞いた日、知人・桜庭に、

「自分は、社会主義は自分の思想の一部分だと話した。」と、すでに書いている。³⁹⁾ 啄木は幸徳事件により社会主義に本格的に傾いたのだが、それもアナキズム的思想である。

啄木の日記によれば、この時の演説会是这样である。添田平吉（一八七二—一九四四）つまり啞蟬坊が「日本の労働階級」、碧川が「吾人の敵」、西川が「何故に困る者が殖ゆる乎」「普通選挙論」の二つであった。添田は、明治・大正期の演歌師で、自由民権派の青年倶楽部に入った。堺利彦を知って、社会主義運動に共鳴し、社会風刺の歌を多く作った。

この演説会に高田紅果も参加している。高田紅果によれば、それに加えて、蠣崎友次郎が出演した。蠣崎は、一八八七年生まれで、札幌農学校に学んだ。当時道庁の役人だったが、後に空知農校の校長になった人である。

高田は書いた。西川は、英国労働運動の闘士、ケア・ハーデーを想像させるような、ズングリした背格好で、人を人とも思わぬ不屈そうな顔容、朴とつで頼もしい社会運動家の風格があった。碧川は、平民大衆にのみ多くかかる消費税の課税をする政府の態度を、甚だ非平民的で資本家に媚びた政策だとして、面白おかしく当局攻撃をした。添田は、自作のワカラナイ節の、リーフレットを持って、演壇の一隅から書生節のような節廻しで「ああ わからない、わからない 今の政府はわからない……」と言った調子で、時局風刺の歌を独唱しながら、そのリーフレットを五銭か十銭で聴衆に頒布していた。閉会后、直ちに茶話会が開かれ、そこに残った者は二十幾名であった。啄木はその場で西川と名を告げ合った。⁴¹⁾

高田はまたこう書く。「啄木はなかなかよく質問する方の側だった。……啄木があまりに初心らしい、いわゆる社会主義入門程度の、質問や話題を出して西川と応酬しているのを傍聴して、啄木の社会思想に対する素養は、他の文学詩歌におけるとは異なり、まだ全く駆け出しの域を出ぬものに見えた。」⁴²⁾

しかし、この高田の発言は、二つの点で納得しがたい。まず高田自身が一七歳の若さにすぎない。つぎに啄木は

すでにかなり深く社会主義について考えているからである。この日の出来事に続いて彼はこう書いている。「要するに社会主義は、余の所謂長き解放運動の中の一齣である。最後の大解放に到達する迄の一つの準備運動である。そして最も眼前の急に迫れる緊急問題である。此運動は、前代の種々な解放運動の後を享けて、労働者乃ち最下級の人民を資本家から解放して、本来の自由を与えむとする運動で、今では其理論上の立脚点は充分に研究され、且つ種々なる迫害あるに不拘、余程深く凡ての人の心に浸み込んで来た。今は社会主義を研究すべき時代は既に過ぎて、其を実現すべき手段方法を研究すべき時代になっている。尤も此運動は、単に哀れな労働者を資本家から解放すると云ふでなく、一切の人間を生活の不条理なる苦痛から解放することを理想とせねばならぬ。今日の会に出た人人の考えが其処まで達して居らぬのを、自分は遺憾に思ふた。」⁴³

「函館日々新聞」の主事あるいは社長だった斉藤大硯(哲郎)(一八七〇〜一九三三)は、函館大火で社が焼失し、小樽にきていた。そこで啄木は彼とよく会談して、ともに飲んでいる。大硯は、一八七〇(明治三)年、青森生まれ、初め日本新聞社に勤め、総督府官吏として台湾へゆき、それを辞めて青森に帰り、函館で日日新聞主筆になった。小樽時代は浪人であった。彼は小樽からまた函館日日新聞に戻った。啄木は、彼をも詠んだ。

樺太に入りて

新しき宗教を創めむといふ

友なりしかな

啄木の家を訪れた人々には、沢田天峰(信太郎)、斉藤大硯(哲郎)、宮崎郁雨(大四郎)、小国露堂(善平)、高田治作、天口堂(海老名又一郎)、藤田南洋(武治)、野口雨情と、すでに述べたが、それ以外に、立花直太郎、本田

荊南(竜)、実相寺一二三、石原善太郎、吉野花峯、桜庭保、在原清次郎、窪田総次郎、畑中某、奥村寒雨(茂俊)、佐田鴻鐘(康則)、西村樵夫(衛)、金子孤堂(満寿)、白田北洲(柳次郎)、園田愛縁らがいる。日記には「此頃予が寓は集会所の如くなり、……何故か予が家は……常に友人の中心となるなり、」と書いた(明治四〇年一〇月一六日)。このうち、在原、窪田、畑中は、小樽日報の営業畑の人である。編集に携わっていたのは、雨情、寒雨をのぞけば、鴻鐘、樵夫、孤堂、愛縁である。荊南、一二三、善太郎、花峯、保、畑中は、小樽在住である。直太郎は岩手県浪民村在住である。

啄木の家を訪問しなかったが、啄木と交流したのは、中村定三郎、白石東寒(義郎)、岩泉江東(泰)、小林寅吉、宮下小路、野田黄州(金太郎)、鈴木志郎、鯉江天涯、笹川某、上田重良、碧川企救男、桜庭ちか子、西堀秋潮、山崎周信、谷寿衛、村田良太郎夫妻などである。

啄木の住んだ家では、西沢善次郎方は、間借りであり、花園町の露地裏は、一軒家である。⁽⁴⁾

啄木が小樽日報を去る時、沢田天嶺は「石川啄木兄と別る」を新聞に発表した。これは啄木の切り抜き帳「小樽のかたみ」にある。

8 新しい就職

啄木は一月七日には羽織と蚊帳を質に入れ二円借りた。一月八日に西堀秋潮から一元五〇銭を借金した。明治四一(一九〇八)年一月八日夜、失業していた啄木は、小樽新聞社長・上田重良の自宅を訪問した。就職斡旋依頼であった。露堂、大硯の計らいだ。一月一〇日、一〇円が白石社長から志として与えられた。一三日、啄木は、『小樽日報』社へ行き、社長の白石から釧路新聞社行きを勧められた。白石は釧路新聞の社長でもあった。沢田信太郎が社長に啄木をすすめたのだ。一八日に一〇円が白石社長から志として出された。こうして啄木は一月一九日に、釧

路へ向けて、単身で小樽を立つ。

この一月、つまり啄木が小樽日報を退社して、釧路新聞へ就職が決まり、その赴任の直前に、やはり高田紅果は藤田南洋とともに啄木家を訪問した。この夜は天才文学青年啄木の博識にハッパをかけられ二人ともすっかり感激して帰ってきた。

釧路に向かう時、啄木は、奥村寒雨との同行を希望した。彼の人格とその技量に信頼を置いたのだった。その後の寒雨は北海タイムスを経て、中央紙で活躍し、その後郷里の秋田県大館に帰った。代議士に立候補すべく、選挙工作に乗り出したこともあるが、散財が激しくなり、晩年は不遇に終わった。⁴⁵

小樽時代に啄木は日付不詳で、一〇円の家賃未払いがあり、佐田鴻鐘・小国露堂から借金一一円が、在原清次郎から五円の借金があった。⁴⁶ およそ近代日本の有名人で借金の天才は野口英世と啄木であろう。啄木の札幌・小樽時代の収入は、一三五円八七銭以上であった。以上というのは宮崎からの借金額が不明だからである。なお借金は返していないだろう。

啄木の生活を救ったのは釧路新聞入社であり、白石社長のお陰であった。啄木は、釧路新聞社に赴任すべく、単身小樽を立つのであった。この時、社長でもある白石義郎と小樽駅を一緒に出発した。白石は、一九〇八(明治四一)年の総選挙に出馬しようとしていた。その地盤固めのために、自分の会社・釧路新聞の拡張を決意し、文才のある啄木を起用したのだった。妻節子が、旅立ちの啄木を小樽駅に見送った。啄木の、小樽時代についての最も有名な歌は、この妻・節子を歌ったものである。現在、JR小樽駅前の標識にある。

子を負ひて

雪の吹き入る停車場に

われ見送りし 妻の眉かな

以上が第三回目の滞在である。啄木には小樽そのものを詠んだ歌がある。その一つは、水天宮にある石碑にあり、昭和五五年に建てられた。

かなしきは 小樽の町よ

歌ふこと なき人人の

聲の荒さよ

啄木が「歌うことなき」と詠んだが、しかし、明治の小樽には総合文芸誌があった。明治三四（一九〇一）年発行の隔月刊『暁星』である。これは明治三五年から『あきつ文学』とされ、明治三六年に元の名にもどって、月刊となった。少なくとも一〇月号まで出た。一方、明治三二年から、和歌の機関誌『蝦夷錦』が出た。これは明治三六年に中断したが、明治三八年からまた再刊されたらしい。だから啄木は、「……歌うことなき……」といったが、堅く言えば誤りである。一九四八（昭和二三）年に小樽公園東山のしらかんばの樹間に五寸角の木の仮碑がたてられた。そこには

かの年の かの新聞の 初雪の 記事を書きしは 我なりしかな

が記された。その後これは誰かに引き抜かれた。

明治四〇（一九〇七）年に啄木が小樽に住んだとき、つまり第三回目の滞在時だが、彼が小樽日報社を辞めたころ、ちょうど小林多喜二一家が秋田からやってきた。多喜二と啄木は、重なっているのである。多喜二は、この時四歳だったので、啄木のことは全然分からなかっただろうが、後年、尊敬する啄木が小樽にいたのだと知って、感慨を深めたことであろう。石川啄木は、多喜二の短歌に影響を与えた人である。多喜二は、よほど啄木の短歌が気に入っていたとみえて、後年、その恋人タキに啄木の短歌を読むように推薦している。また本人の短歌にも啄木張りのものがある。彼は短歌を、啄木によって学んだのだった。

9 啄木の小樽論

啄木は、「小樽のかたみ」というスクラップを作っていた。そこにはこうある。「当時小樽は、人口一〇万で、その膨張が急速であつた。商港としては、函館を凌駕して「北海道で」第一位に上がった。日露の協約が成立してからは、ウラジオストックとの貿易で、覇を敦賀と争っている。新聞も上田重吉（重良である）の小樽新聞は三千幾百号となり、約一万部を越えている。小樽にきて初めて真に新開地的な、真に植民地精神の溢れる男らしい活動を見た。小樽の人は歩くのでない、突貫するのである。道路は、日本一の悪路である。小樽人の特色は、執着心のないことである。」さらに啄木の（47）小樽論を、彼の日記から見てみよう。啄木は、小樽の道路は日本一の悪路である、と書くが、本人は悪意をもっては書いていないようである。つまりこうである。小樽は「男らしい活動の都府」であり、「此活動の都府の道路は人も云ふ如く日本一の悪道路である。善悪に拘らず日本一と名のつくのが、既に男らしいではないか。且つ他日此悪道路が改善せられて市街が整頓すると共に、他の不必要な整頓——階級とか習慣とか云ふ法則まで整頓するのかと思へば、予は一年に十足二十足の下駄を余計に買わねばならぬとしても、願わくば未来永劫小樽の悪路が日本一であつて貰いたい。」（48）

啄木が「小樽日報」に書いた三面記事は、「小樽のかたみ」に残されていて、彼の『全集』に入っている。文字通り、当時小樽の三面記事である。

第七節 釧路時代

明治四一（一九〇八）年、啄木は小樽を出て、釧路駅におりたち、新聞社で数カ月働いた。小樽の留守宅は、花園町十四番地星川丑七方へ移った。現在のあづま通り、であり、あるいは辰巳通りだという説もある。二階屋の古い家で、大きい建物の中に一室を借りて、母、妻、娘、の三人が住んだ。高田たちも、啄木に言われていたので五日に訪れた。ほかに啄木の在釧路中に訪れたのは、沢田天峯である。妹・光子は、日本メソジスト（今の日本基督教団）小樽教会で、二二歳の春、洗礼を受けた。その後、三浦牧師と結婚した。小樽に残された家族は経済的に困難な生活をした。送るべき生活費を啄木がほとんど送らなかったからである。さて啄木は、釧路で仕事が続かなかった。東京へ出て文学で立つことにきめたからである。彼は日本一の歌の天才と自分を思っていた。彼の釧路時代の歌の一つは次である。

しらしらと 氷かがやき

千鳥なく

釧路の海の冬の月かな⁽⁵⁰⁾

第八節 第四回目の来樽

啄木は釧路の新聞社を辞職した。文学のため上京することにしたのである。啄木は自分では才能があると信じていたが、中学中退という学歴では、世間は彼を認めてくれなかった。こうして彼は漂泊したのである。釧路港から石炭運搬船で出港したが、これはまず宮古港についた。束の間下船して、函館の友人・宮崎郁雨宅へ舞い戻り、相談した。それにより、啄木だけがまず上京し、この友人に家族の面倒を見て貰うことになった。第四回目の小樽来訪は、このためである。一九〇八（明治四一）年四月一三日、彼は函館から、家族のいる小樽へ向かった。そして四月一四日、小樽に着いた。小樽に残っていた家族をまとめて函館へ引き揚げるためであった。この時、小樽には一週間いた。啄木が辞めた釧路新聞社の後任として、露堂がきまった。

丁度このころ、明治四一年四月一八日、小樽日報が廃刊となった。啄木の日記には、「小樽日報今日より休刊、実は廃刊。不思議なるかな、自分は小樽に来て、今はしくも其死ぬのを見た。」この新聞は廃刊した。啄木が在樽中のことであった。こうしてこの新聞は六カ月しか続かなかったのである。啄木がまだここに勤めつづけていても、職を失っていたことになる。

啄木が小樽にきた時、露堂は最後に訪ね、「君のあとがまとして釧路へ行くよ」と、告げた。啄木が明治四一年北海道から上京するとき、四月一四日、野口雨情と二人は小樽で出会った。その時、野口は、明日小樽を引き払って札幌へゆき、月の末ころには必ず帰京の途につくとのことで、だいぶ天氣がよかった。ちょうど啄木も同じ決心をしていた時だから、なるべく函館で待ち合わせて、一緒に津軽海峡を渡ろうと約束して別れた。だが啄木一人、二五日に函館を去って海路から上京した。

1 野口雨情(2)

野口雨情は、明治四〇年、詩集「朝花夜花」を出す。しかし喰えない。雨情の「朝花夜花」はともかく中央で一部に迎えられた。創作民謡だった。「からすなげなくの……」の原型がある。その後、雨情と啄木は一度東京であつて、話をしたことがある。

明治四四年、野口はとうとう北海道から帰郷する。そして植林事業に精を出し、公共のために尽くした。中央では北原白秋が登場した。野口雨情は俳句の会に加わった。また酒色におぼれた。夫人ひろは、実家の背景もあり、性格も男まさりで、生活力のない雨情へ不満を持ち、文学に無理解だった。雨情は一九一五(大正四)年に妻ひろと離婚し、福島県の芸者置屋のおかみ、明村まち小(お)すみと同棲した。その後、水戸でつると会い、一七歳のつると結婚し、水戸へ出た。大正七年(一九一八年)だった。水戸での生活は一年で、貧困をきわめた。彼はここで雑誌編集にかかわった。つるは夫に従順だった。雨情は、詩壇に復帰した。野口雨情は、水戸で、その苦境の中で、「船頭小唄」を書いた。彼はお金に無頓着だった。彼は三木露風や西条八十との交友で、大正八(一九二〇)年に上京した。すなわち文学で飯を食うようになった。そして「都会と田園」を出す。東京では、雑誌「金の船」、つまり、のちに「金の星」となる雑誌で、童謡の選者になった。童謡集「十五夜お月さん」を大正一〇年に出した。これで田園詩人となったが、だんだん歌謡作家になった。「雨降りお月さん」を書いた。大正一一年の末から彼の「枯れすすき(船頭小唄)」が歌われはじめた。大正一三年に吉祥寺に転居した。作品に、「青い目の人形」「七つの子」「青い目の人形」「赤い靴」、以上、本居長世作曲がある。「波浮の港」「証城寺の狸囃子」「鬼のだんす」「きゅーぴーちゃん」「あの町この町」「しゃぼん玉」「雨降りお月さん」「枯れすすき」、以上、中山晋平作曲、がある。その他「黄金虫」「俵はごろごろ」がある。「波浮の港」は、昭和五年前から全国を風びした。大正一五年前作詞され、中山に作曲され、ビクター・レコードで、歌手佐藤千夜子によって吹き込まれたのは、昭和三年四月だった。「紅屋の

娘」も、佐藤千夜子が吹き込んだ。彼女は小樽出身である。大正九年に中山晋平の曲がつけられていた。昭和四年六月の吹き込みであり、昭和四年に大流行した。

雨情は、一九二七（昭和二）年七月に、大雪山夏期大学講師として来道し、その後度々、名寄、余市を訪問した。さらに、昭和八（一九三三）年、函館図書館を訪れた時、当時未公開だった啄木の日記を見ている。昭和一九年、野口雨情は戦争のため宇都宮に疎開した。昭和二〇年（一九四五年）、疎開先の栃木県で、六二歳で死去した。野口雨情は、北原白秋（一八八〇～一九四二）、西条八十（一八九二～一九七〇）と並ぶ童謡の三巨星である。彼は近代童謡の基礎を作った。⁽⁴⁾

2 最後の小樽

さて啄木は、釧路から函館へ戻った。郁雨に、函館で再度、函館日々新聞社に入れて貰うか、あるいは東京に出て創作に専念したいという意向を漏らした時、郁雨は「東京へゆくべきだ」ということを即座に進言した。啄木は、家族を函館の郁雨のもとに残して、単身東京へゆくこととした。そこでさしあたり、家族を引き取りに小樽へ向かった。その時、郁雨は再び、光子のことを聞いてみた。彼は「あいつは駄目だ。あいつは僕の友人の処へは絶対やらない」と答えた。

啄木は四月一三日、郁雨から一五円貰って夕七時一〇分、函館を出た。一四日朝八時に小樽についた。俵を走らせて花園町畑一四星川方の家族の待つ家へついた。「感多少」と、彼はかく。京子が自由に歩きまわり、まわらぬ舌で物を言った。啄木は一時ころ野口雨情を海運町に訪ね、共に散歩した。野口は一五日に札幌へ行き、四月中に上京するという話だった。夜、沢田が来た。「いくら努めても、合わぬ人とは矢張合わぬ」と、啄木は記すのである。啄木は宮崎に手紙を書いた。「みつ子の事、札幌の教会の牧師の世話にて、東京の何とかいふアーメン先生へ嫁に

行く話八九分纏まったとの事」(二四日)。

啄木は四月一五日には、二葉亭の「平凡」と鏡花の「草迷宮」を読んだ。午後、札幌から小国善平が来た。啄木の代わりに釧路に行く、とのことだった。夜、藤田南洋Ⅱ武治と高田紅果の二人は啄木を訪ね、色々文学談など交わして、一時まで語った。彼らは深更に戻った。

啄木は一六日夕、小国と公園に散歩し、共に佐田を訪れた。奥村と四人で一二時まで語った。小樽日報では小谷がやめ、山県との手が切れて、形勢すこぶる不穩、との話を聞いた。

一七日、郁雨から啄木に手紙が来た。実際の常識の必要を説いていた。七円がはいっていた。その返事と、白村正二への手紙、立花直太郎への手紙、釧路の上杉小南などへの手紙を啄木は書いた。夜、社会主義者塚原新人が来た。

一八日、小樽日報が休刊し、つまり廃刊され、啄木もそう書く。「不思議なるかな、自分は日報の生まれる時、小樽に来て、今はしくも其死ぬのを見た。」と。彼がここを辞めなくても、おそかれはやかれ、小樽を去ることになったはずである。小国、佐田、奥村が、啄木のところへ来た。夜、奥村が再来した一二時まで快談した。

啄木は一九日に、古道具屋を呼んで雑品(家財道具)を売り払った。夜、はからずも本田荊南が来た。荷物のことを奥村に置き手紙で頼んで、その夜八時一〇分、啄木は家族を連れて、小樽駅から函館へ汽車に乗って立発した。つまりこの時は六日間だけ小樽に滞在したことになる。彼らは二十一日、函館の宮崎郁雨のところへ行行った。そして宮崎の貸家に落ち着いた。まず、啄木だけが二十四日、東京へ出るのであった。

以上が、啄木と小樽との関わりのあらましである。

その後・むすび

「啄木が北海道における実生活からまなびとつたものは、はかりがたいほど豊富多量であつたと思われる。彼の人生詩人、生活派詩人としての基礎がこの期において形つくられたといつても誤りではあるまい。」特に北海道時代、それも小樽時代、啄木は生活に困つた。だから、そこから生活派の歌風が生まれたとすれば、北海道時代・小樽時代は意義が大きい。次に、北海道で野口雨情に教わりながらジャーナリストとして出発した。最後に、母と妻との間の壮絶なる闘いを知り、その渦中であつた。

啄木は、上京したが、うまく行かなかつた。明治四二（一九〇九年）に、やっと朝日新聞の校正係になつた。ようやく、あるいは、いやいや、母、妻子を函館から呼びよせた。彼は東京時代に、長男を幼子のうちに病気でなくし、それを詠んでいる。

二三こゑ

いまはのきはに　微かにも　泣きしといふに
なみだ誘はる

大逆事件が起き、この幸徳事件を知つて、啄木は歌つた。

明治四十三年の秋　わが心ことに真面目になりて悲しも

大逆事件（一九一〇年、明治四三年）後、一九一一年一月末、小樽の短歌会で、青年たちは幸徳秋水をしのぶ短歌を一斉に詠じた。一九一〇（明治四三）年一二月、啄木生前の歌集「一握の砂」が東雲堂書店から出版された。啄木は、東京時代に素晴らしい短歌や評論を書くのであった。例えば、「時代閉塞の現状」である。⁵⁴啄木は社会主義、実際はアナキズムに同情していた。幸徳の獄中の陳弁書を、幸徳事件の弁護士、平山修（新詩社同人）から借りて筆写している。

小林多喜二⁵⁵の小学校時代、彼が三年生になったばかりの時、石川啄木は一九一二（明治四五）年四月一三日に、結核で貧窮のうちに東京で死んだ。その一カ月ほど前に母が結核で亡くなり、その後、妻節子も結核で亡くなるのであった。すべて母からの感染であった。

啄木は生活破綻者であった。彼は自分を天才視していた。もちろんそのくらいでなくては、才能を伸ばせないかもしれない。だが経済生活では、妻や友人に迷惑をかけ続けた。彼はいつも借金生活に追われていた。しかもそれを返せない、あるいは返さなかった。啄木の借金は、全体で一三七二円五〇銭になり、そのうち北海道時代は四八三元である。⁵⁶一元はいま（二〇〇〇年ころ）の一万円にあたとされる。啄木はこれらの借金を返そうと思ったのだろうか。彼は金額をしつかり記録していたので、返そうと思ったとされる。しかし、どうか分からない。友人で経済的に最も世話を焼いたのは、宮崎郁雨である。郁雨は節子の妹と結婚した。東京時代では、金田一京助、とくにその妻には、啄木は迷惑をかけた。

さて伊藤整は、啄木を最も北海道的な文学者だと言った。「やはり『国木田』独歩以来のあらゆる芸術家のうちで一番北海道的なのは石川啄木であろう。啄木は岩手県人であるけれども、北海道的な要素を最もよく把握している。ああいう無慈悲的な荒々しい自然の中の人間生活の痛々しさを啄木のように（その感傷型がどうあろうとも）直接に投げ出した人はない。啄木の芸術こそ純北海道的なものだ。」⁵⁷

昭和二二年には、高田紅果は、小樽啄木会を作っている。啄木の影響で、短歌では生活派が生まれた。⁽⁸⁸⁾なお啄木の特別展が昭和六一年九月五日から一〇月一二日まで小樽市立文学館で行なわれた。小樽公園には一つの歌碑がある。

こころよく

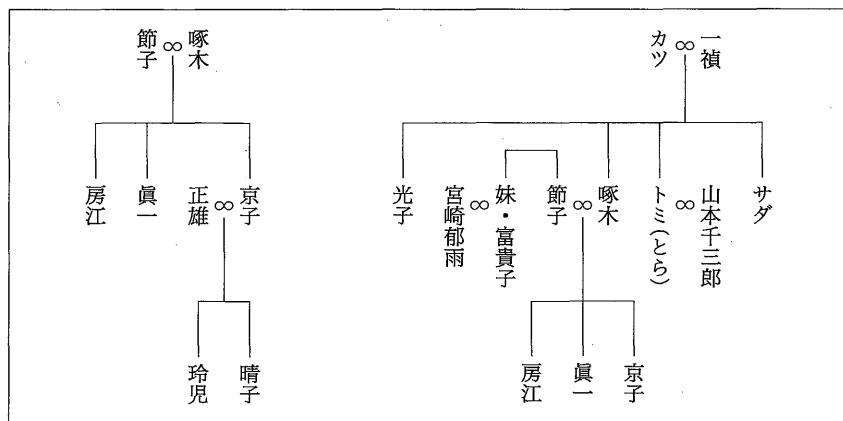
我に はたらく仕事あれ

それを仕遂げて 死なむと思ふ

啄木は、この歌詞の通りには全くならなかった。小樽公園に歌碑を作る時、前出の「かなしきは……」が、市民投票では大多数をしめた。しかし歌が好ましくないという市からの要請で、これに変更された。⁽⁸⁹⁾「かなしきは……」は、小樽を悪く言っているように思われるのに、それを選んだ小樽の人たちは立派であった。

啄木が社会主義思想を持った。としてもそれは多分アナーキズムに近いものだったろう。小国露堂などの影響があったかもしれない。また、西川らの演説会への参加で、影響を与えられたかもしれないとすれば、また彼の小樽時代は意味が大きかっただろう。

なお、啄木の系図は、次である。⁽⁹⁰⁾



年表

一八八六年

石川啄木、生まれる。

一九〇四年

啄木、第一回目、来樽。

一九〇七(明治四〇)年九月

・木、来樽、第二回目。

同

一二月

小林多喜二一家、来樽。

一九〇八年

啄木、第三回目 来樽。

一九一二年

啄木、亡くなる。

一九四七年

高田紅果の主唱で小樽啄木会が誕生。

- (1) 阿部たつを『啄木と函館』幻洋社 一九九二年。
- (2) 『小林多喜二伝』論創社、参照。
- (3) 阿部。しかし主筆という説もある。
- (4) 汽車は、函館↓小樽↓札幌という経路である。
- (5) 『石川啄木全集』第5巻 筑摩書房 一九八三年。
- (6) 同。
- (7) 同。
- (8) 平輪光三『野口雨情』日本図書センター 一九九〇年。
- (9) 『啄木全集』第5巻。
- (10) 荒木茂、稿『新・小樽のかたみ』18ページ。
- (11) 宮崎 62ページ。
- (12) 高田紅果「ありし日の啄木」(小樽啄木会編『啄木と小樽・札幌』みやま書房 一九七六年) 182〜3ページ。
- (13) Verhaeren, Emile, 1855-1916. ベルギーの詩人。
- (14) Schopenhauer, A., 1788-1860. ドイツの哲学者。
- (15) Wagner, W. Richard, 1813-83. ドイツの作曲家。
- (16) 初出では、「ちらと笑みにき」。
- (17) 越崎宗一「紅果と啄木歌碑」による。越崎はついで、「クラルテ」をあげている。つまり多喜二編集の雑誌である。しかし「クラルテ」に高田は書いていない。
- (18) 参照、『小樽高商の人々』北海道大学図書刊行会 二〇〇二年。

- (19) 宮崎郁雨『函館の砂』東峰書院 一九六〇年、30ページ。
- (20) 同 63ページ。
- (21) 堅田精司編『北海道社会運動家名簿』。
- (22) 啄木「明治四十一年日誌」(『全集』第5巻)、199ページ。
- (23) 『新・小樽のかたみ』
- (24) 『しおみだい』、そして同小学校に掲示されているプレートから、作成してみた。
- (25) 『新・小樽のかたみ』
- (26) 宮崎、42ページ。
- (27) 同、42〜43ページ。
- (28) 沢地久枝『石川節子』講談社。
- (29) 岩城之徳『石川啄木』桜楓社 一九八四年、156ページ。
- (30) 沢地前掲書。
- (31) 『啄木全集』第8巻、369ページに六首、370ページに七首、371ページに五首。
- (32) 安部磯雄、福岡生まれ、同志社卒業、一九二八年の普選で当選した。『安部磯雄』論創社。
- (33) 琴坂手稿「小樽の労働運動 年表」。
- (34) 堅田精司編『碧川企救男論説集』一九七三年 49ページ。荻野富士夫「碧川 企救男小論」(『初期社会主義研究』一九九九年、第12号)
- (35) 琴坂「小樽の労働者の伝統」(『北海道経済』一九七八年九月) 17ページ。
- (36) 田中英夫『西川光二郎 小伝』みすず書房。

- (37) 倉田 稔『小林多喜二伝』論創社、参照。
- (38) 堅田編書。
- (39) 啄木「明治四十一年日誌」(『石川啄木全集』第5巻 筑摩書房一九八三年) 184ページ。遠地輝武『石川啄木の研究』改造社一九三四年、76ページ。
- (40) ハーディ (Keir Hardie, 1856-1915)。イギリスの労働党創設者。
- (41) 啄木「明治四十一年日誌」184ページ。
- (42) 高田紅果「ありし日の啄木」(小樽啄木会編『啄木と小樽・札幌』みやま書房一九七六年) 180ページ。ただし新漢字で表現した。
- (43) 『啄木全集』第5巻 195～6ページ。
- (44) 宮崎、29ページ。
- (45) 福地順一「石川啄木周囲の人々」(市立小樽文学館 特別展石川啄木・小樽——北の旅、パップレット)
- (46) 福地順一「北海道時代の啄木とその経済生活」緑の笛豆本の会 平成一二年。
- (47) 『全集』第8巻。
- (48) 『石川啄木全集』第8巻 355、360、361ページ。
- (49) 釧路時代については、北畠立朴『啄木に魅せられて』北龍出版 平成五年。
- (50) 釧路市の米町公園にその歌碑がある。
- (51) 平輪光三『野口雨情』日本図書センター 一九九〇年。
- (52) 山田あき「石川啄木の短歌革新の意義」(『明治短歌史 近代短歌史第一巻』春秋社 一九五八年) 218ページ。
- (53) (参)『啄木と小樽・札幌』。沢地久枝書。

(54) 拙書『現代世界思想史 序説 上』丘書房でも少し触れた。

(55) もっとも詳しい伝記として、倉田 稔『小林多喜二伝』論創社、見よ。

(56) 北畠、作成。

(57) 『伊藤整全集』第23巻 新潮社、33ページ。

(58) 碓田のぼる「小林多喜二と石川啄木」(『新日本歌人』一九六〇年四月)。

(59) 大塚金之助先生は、「石川啄木という人は、随分昔の人と思っていたが、僕と同時代人だったのだなあ」と語ったことがある。(拙書『大塚金之助論』成文社)。

(60) 碓田のぼる。

(61) 阿部たつを、156ページ。

その他文献：藤田南洋「雪夜啄木を訪ふ」(『北海道グラフ』) 新潮日本文学アルバム『石川啄木』。岩城之徳『石川啄木』吉川弘文館